

水曜通信 6

東北学院宗教センター編

2021年
2月

LIFE

LIGHT

LOVE

主を畏れることは知恵の初め

(箴言1:7)

押川先生と一緒に仙台に基督教教育を根付かせた新島襄は、同志社創設の目的を語って、それは単に基督教の信者を増やすのではなく、「なおその上」、すなわち基督教によらねば現実生活は成り立たない、だから基督教主義で青年の精神と品行を陶冶することとしていました（『教育宗教論集』岩波文庫、31頁）。慶應義塾を創設した福澤諭吉も同じです。教育の根本に基督教があるとして、アメリカの宣教師たちを三田のキャンパスに住まわせていました。

東北学院の教育を支えているのも礼拝です。現実を超えた超越を知る、そしてその超越が人となったことによって、「永遠の相のもとで (sub specie aeternitatis)」過ぎゆく現実を生きることが出来ます。「若き日に創造主を覚え」（コヘレトの言葉12:1）、そして「いのち、ひかり、あい」として世の中で働きましょう。

YouTubeによる水曜公開礼拝も2月で2020年度は最後です。また4月から再開します。近いうちに礼拝堂でも皆さんと一緒に神さまを賛美できますように。

研究ブランディング事業担当 鐸木 道剛



泉キャンパス礼拝堂



次回：第40回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝) 2月24日配信予定

学校法人東北学院ホームページまたは右のQRコードからご覧いただけます。

【第1部 礼拝】 説教：川島 堅二（本学総合人文学科長）
演奏：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

【第2部 音楽による賛美】
演奏：小野 なおみ

*3月の水曜公開礼拝はお休みです。第41回は4月21日配信予定です。



第39回 水曜公開礼拝報告（説教：田島 卓、奏楽：渡辺 真理）

2020年1月27日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：280番「わが身ののぞみは」
聖書：申命記 26章5-11節
讃美歌：391番「ナルドの壺」
説教：「旅の途上に」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

貧者や社会的弱者の保護というキリスト教の特徴であるかのような印象がありますが、実は古代中近東世界において、王や支配者の道徳として「貧しい人々の優先的選択」が説かれていました。しかし、人間である王たちが支配者として権力とともに貧者の保護を行なっても、格差のシステム自体が維持されてしまうために、結局、貧富の格差は解消されません。出エジプトとは、そのような経済システムからの脱出でもあり、人が人を支配するという世界からの脱出でもありました。一見動かしがたくみえるこの世界は、実は他のあり方をするのが可能です。その探求の旅に出ることへと、私たちは招かれているのではないのでしょうか。

（文学部 田島 卓）

前奏：バッヘルベル コラール前奏曲「み心はつねに成し遂げられる」P489

後奏：バッヘルベル コラール前奏曲「こぞりて主を頌め」P183

1/6の公現日は、東方の博士たちが幼子イエスに礼拝した記念日で、その後復活祭まではイエス・キリストの栄光の顕現を祈りをもって偲ぶ時であります。前奏の「み心は常に成し遂げられる」は、神に対する揺るぎない信頼をあらわす内容のコラールで、J.S.バッハも顕現節第3週のために同名のカンタータを作曲しています。後奏の「こぞりて主を頌め」は頌栄讃美歌539番として礼拝でもよく歌われているコラールです。（礼拝オルガニスト 渡辺 真理）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：渡辺 真理）

1. スヴェーリंक(1562-1621) トッカータ イ短調 SwWV 298
2. F.メンデルスゾーン(1809-1847) オルガンソナタ第2番 Op. 65 No.2

1曲目は今年没後400年を迎えるオランダの作曲家でオルガニストのスヴェーリंकの小作品、トッカータ イ短調です。スヴェーリंकはバッハにつながる豊かなオルガン音楽の源であることから、「ドイツ・オルガン音楽の父」と呼ばれ、その作品は同時代のイギリス、イタリア、スペインの音楽語法が見事に統合され柔らかな光を放っており、オランダ黄金時代の絵画を観るようです。

2曲目のメンデルスゾーンのオルガンソナタ第2番は、重苦しい1楽章に始まり、祈りに満ちた2楽章、希望を持ち前進するような3楽章、神への確固たる信仰を思わせるフーガとコラールの4楽章と一連になっています。選曲にあたり、元気の出る曲を…とのリクエストもいただきましたので、コロナ禍で心が苦しい中にあっても祈り希望を持ち、神様に身を委ねる…そんな今の心情と重ね合わせ、そしてコロナの早い収束を祈って演奏しました。

（礼拝オルガニスト 渡辺 真理）



東北学院の草創期 (5) 「どこで？」

最初の生徒の一人で岩沼出身の島貫兵太夫は、家族の反対を押し切って、初めて神学校を訪れた時の様子を次のように回想しています。

「仙台に到着して、この度開校するという神学校を尋ねて行って見ると何も無い。・・・よく聞いて見ると、木町通りで北六番丁と北七番丁の間だという。そこへ行って見ると、家はあるにはあるが、茅葺の破れ家があるので、それには驚いてしまった。」

創立の場所について、より詳しく記述しているのは『東北学院七十年史』です。「市内木町北六番丁から西へ二軒目（現在、東北大学医学部付属病院の一部、元仙台第二中学校の辺）に一軒の民家を借り、これを教室兼寄宿舎に宛て」たと明記されています。掲載した地図は、ランカスター神学校に保存されていた明治十七年発行の「仙台区全図」（部分拡大）です。ホーイ自身の手書きにより「VIII」と赤字で記入され、当時の呼称と思われる“Training School for Evangelists”と説明されています。しかし、一区画南（木町通り・北五番丁角）に印されているのは明らかにホーイの誤りです。

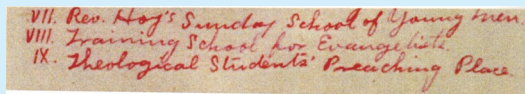
神学校は翌年の1887年5月には東二番丁と南町通り角にあった本願寺仙台別院跡に移転しました。本堂を仙台教会が、西側の僧坊と長屋を神学校が使用しましたが、やがてこの西側の敷地をホーイが自費で購入し、壮麗な校舎が建築されます。仙台神学校はここで1891年に「東北学院」と改称したことから、現在この場所に「東北学院発祥の地」の記念碑が建てられています。



最初の教室



○印が創立の場所
(木町通北六番丁角)



ホーイ自筆の説明書き

一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から (12) 一

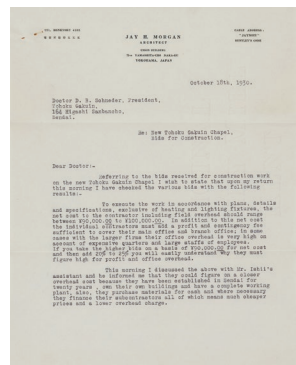
前号で、礼拝堂の建設時に実施された入札の状況（8社からの見積額）が分かる史料について紹介しました。今回はその続編です。

見積りが出揃った3日後の1930（昭和5）年10月18日、モーガンからシュネーダーに新たな書簡が届けられます（右図）。

モーガンは、設計者の立場から各社の見積額を検討します。とりわけ彼は、礼拝堂の正味建設費を設計内容に照らして9～10万円と積算し、間接経費や建設会社が受け取るべき利益をその20%内外と概算して、妥当な額を探っています。

そこでモーガンの目に留まったのが、実際に礼拝堂を施工することになる石井組です。提示した金額は低価側から数えて8社中3番目でしたが（建築工事費108万円）、その額はモーガンの考えとまさに一致するものでした。手紙には、早速モーガンが石井組と面会し、納得できる返答を得たことも報告されています。石井組が46年の事業経歴を有し、特に仙台において20年の実績を有する点も、妥当なコストの実現を後押しするだろうとしています。

“設計者の仕事は施主の利益を守ることにあります”モーガンはそのような立場から、石井組が最良の結果をもたらすと結論づけ、シュネーダーに石井組との契約を提案します。モーガンの建築家としての姿勢が垣間見える書簡です。シュネーダーは、その提案を受け入れます。



モーガンからシュネーダー院長への手紙
(1930年10月18日付)

(工学部 嶋山 俊雄)

ランカスター神学校の思い出（４）「ランカスターの特産品」

これまで数回に分けてランカスターでの思い出を書いてきました
が、それも今号が最終回になります。今回は、ランカスターの特産
品について記したいと思います。今はコロナ禍のため困難ですが、
終息後に旅行する機会があれば参考にしていただければ幸いです。

ランカスターは、周辺にアーミッシュの人々が居住しているこ
ともあり、アーミッシュ・キルトがお土産の定番と言えます。し
かし本格的なものは高価であり、また好みも分かれることでしょ
う。そこで、おすすめしたいのは食料品です。元来、農業や牧畜
が盛んな地域であり、特にオーガニックのジャムやバター、チー
ズは絶品です。

これらの製品は、ダウンタウンにあるファーマーズ・マーケット
などでも購入できますが、穴場として紹介したいのは、ランカスター
神学校から歩いて15分ほどのところにあるレモン・ストリート・
マーケット (Lemon Street Market) という店です。ここは観光客
向けの店ではなく、ローカルな店ですが、オーガニックの食料品と
共に、ハンドクリームなどの雑貨・日用品もあるので、お土産にも
うってつけです。神学校滞在中に、散歩がてら、たびたび足を運ん
だのを懐かしく思い出します。
(文学部 藤野 雄大)



美術による賛美（３）

ホフマンの『ゲッセマネのキリスト』の続きです。1890年に描かれて以来、人気の絵画でした。早くも
1899年に日本画で模写している下岡蓮杖 (1823-1914)は長老派のプロテスタント、「イエス・キリスト (IC
XC)」との銘文をつけてアイコン (聖像) にしている山下りん (1857-1939)は正教会つまりロシアからのキ
リスト教、そしてアメリカの合同派のステンドグラスもあります。画材も紙、キャンバス、そしてガラスと様々
です。この神さまの人間的な苦しみは、イザヤ書の「苦難の僕」であり、また「神の痛みの神学」で、キリ
スト教の宗派を超えるだけでなく、和辻哲郎も『埋もれた日本』の中で書いているように、室町時代の「説
経師」のお話にも見られる広く神話的な表象でもありました。
(文学部 鐮木 道剛)



下岡蓮杖
1899年制作 (部分)
(蓮杖写真記念館提供)



山下りん
制作年不詳(1910年前後?)
鹿沼正教会1998/7/5撮影



作者不詳
Trinity United Church of Christ
East Petersburgにて
2018/8/5撮影



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第6号

2021年2月8日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者: 宗教センター主任 野村信

編集協力者: 鐮木道剛

東北学院宗教センター TEL: 022-264-6558

Email: c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp